



窪川の街中から、仁井田方面に向かう。国道56号の高知道・四万十中央インター出入り口を過ぎ、ひとつ坂越えた辺りから浜ノ川である。東又方面から来る県道52号との交差点には瀟洒な住宅が建っていてひときわ目を引く。浜ノ川には現在17世帯、35人が暮らしている。

浜ノ川の歴史を探ってみる。戦国期・天正16年(1588年)の地検帳によれば、農地が八町七反あるが家屋の記載がない。これは、近隣の村からの出作(でさく・でづくり・しゅつさく)と読む場合もある。地であったと考えられている。また、それら農地の領主が志和氏、佐竹氏、西氏、東氏の4氏に分割されており、おそらく、年貢の納め先について、居住地の領主と耕作地の領主との間で複雑な争いがあつたのではないかと推察される。こういったケースは、中世の日本各地で見られ、決して珍しいことではない。江戸期に入り、支配層が安定してからも、このような耕作形態は、地主小作の関係とも複雑に絡み合い、近世まで続いた。

浜ノ川の場合は、山内家による支配となった江戸期に入って居住者が現れ始め、出作地の割合は少しずつ減少した。しかし、寛保年間(1741~1743年)の記録によれば、戸数もまだ5戸、人口もわずか22人とあり、すべての農地をこの人数で耕作していたとは考えにくいので、出作

地もそれなりには残っていたと考えられる。江戸期に入ってから居住者が現れたと書いたが、それによって浜ノ川村が誕生したわけではない。実は居住者がまだ存在していない戦国期に、すでに浜川村あるいは浜之河村と記されていた。もしかすると、戦国期より前は集落があつたのかもしれないが、定かではない。

ところで、現在、木材のチップ工場がある辺りに「尾上の松」あるいは「相生の松」と呼ばれた、それはそれは立派な松の木があつたと言われている。この松は一里塚でもあつたという。平安時代末期の武士でもあり、僧侶でもあり、歌人でもあつた西行法師が詠んだといわれている歌の中にも、この松が登場する。その松は幕末までは存在したようであるが、はたしてどこに消えたのか謎であつた。平成17年(着工は10年)にこの辺り一帯は基盤整備されたのであるが、その時に直径1mはあろうかという松の幹が出土。それが相生の松ではないかと考えられているのであるが、真偽のほどは明らかではない。



気付きにくい、四万十町で最も古いコンクリートの橋。国道56号に架かっている。

町のうごき				四万十川の 水質状況			
(2月28日)	人口	前月比		適正值(mg/l)	3月12日		
男	8,369	-11	男 1 18 20 14	リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下	
女	9,379	-8	女 2 8 15 17	硝酸	≤ 0.5	0.397	
計	17,748	-19	計 3 26 35 31	アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下	
世帯数	8,606	1	(2月中の届出)	アニオン活性剤	≤ 1.0	0.25	
窪川地域	12,448人			化学的酸素要求量	≤ 10.0	4.973	
大正地域	2,538人						
十和地域	2,762人						

調査：大正(吾川)
資料：四万十高校自然環境部